ぺた語義

Vol. 66

CONTENTS

【コラム】情報教育の哲学?… 竹田 尚彦
【解説】高専プログラミングコンテストの熱い戦い―競技部門編―… 寺元 貴幸
【解説】教育に活かすマインドフルネス… 山川 修

COLUMN

基般

情報教育の哲学？

発想支援に関する研究をしていたころ，某研究所での懇親会の後，某駅へ向かう道すがら KJ 法の川喜田二郎先生と歓談していた．

ふと，先生は「KJ 法のいちばんの肝はなんだと思う，君は？」と問われた．緊張した私は「離れ猿（未分類になってしまう）カードをできるだけ作らないこと．グループの名札を体言止めにせず文にするよう努力すること」などと答えたと思う．すると先生は「まあ，そんなところかなぁ」とおっしゃって笑っておられた．

KJ 法が単なる情報整理術ではなく，「発想法」と言われるゆえんは，そんなところにあるのだろう．収まりの悪いカードをあちこちに移動したり，名札を必死に考えたりするときに，脳のどこかが発火して，ふだんは思いつかないような「発想」が出てきたり，図解ができてみると「あ，こんなことも考えていたのだ」と我ながら感心したりすることがある．

情報分野でも問題解決の方法としてブレーンストーミング（ブレスト）や KJ 法が紹介されている．ブレストや KJ 法の手順自体を説明するのは難しくはない．ある本には「KJ 法をするときは，色の違う付箋を用意しておいて，内容別にカードを書くと分類が楽である」などと書かれていて仰天した．たしかに，情報整理としての効率は上がるだろうが，肝心な発想は出てくるのだろうか．ブレストも，形だけのブレストが多いように思う．

John Dewey は言う，「思考という要素を含まなければ，経験は意味を持ち得ない」と．手順を効率的になぞるだけのブレストや KJ 法は，もはや経験としての意味を持ち得ないのではないか．

昨今，「○○教育」「○○メソッド」「○○ラーニング」「○○授業」などさまざまな教育法が注目され，中にはもう忘れられているものもある．いつもとは違う授業を実施すれば，一定の「成果」は（一時的に）得られるだろうことは容易に想像できる．しかし，それが継続的に行われたとき，本来の意味での教育的「効果」があり，子供たちの経験として意味を持ち得たのかを測定することは難しいだろう．

情報教育分野では，新しい方法論が目白押しで，どれも見るべきものがあり，報告集などを読むと一定の成果が上がっているように思える．しかし，何かピンと来ない部分がある．それは「どのような思考の要素を含み，どのような意味のある経験を持たせるか」ということだ．

川喜田先生や Alex F. Osborn が持っていた「哲学」が，今こそ情報教育には必要ではないだろうか．

竹田 尚彦（文部科学省）

本コラムに記す見解は筆者個人のものであり，文部科学省の見解・政策等とは必ずしも関係ない．

LOGOTYPE DESIGN...Megumi Nakata, ILLUSTRATION&PAGE LAYOUT DESIGN...Miyu Kuno